

オーク英雄物語

忖度列伝

理不尽な孫の手



ファンタジア文庫

2997

ORC HERO
STORY

オーク英雄物語

付 度 列 伝

口
絵・本文イラスト
朝風

付度（そんたく）…他人の心情を推し量ること、また、推し量って相手に配慮すること。
（出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』）

プロローグ

かつて、大きな戦争があった。

大きな大きな、長い長い戦争だ。

ヴァストニア大陸全土が戦場となった、いつ終わるとも知れない、泥沼の戦争だ。
戦争の発端は、誰も憶えちゃいない。

エルフの古い言い伝えによれば、最初はデーモンの王子が、とあるヒューマンの国の姫をさらったことだと言われている。あるいはドワーフの言い伝えでは、ヒューマンの王がデーモンの村を攻め滅ぼしたことだと言われている。

言い伝えを統合するに、ヒューマンとデーモンが発端であったのは間違いないが、どちらが悪いなど考える者は、とくに生きちゃいなかった。

一つだけ言えるのは、その戦争は五千年以上続いたということだけだ。

ヴァストニア大陸に住む十二の種族を巻き込んで。

誰もが、この戦争は未来永劫、ずっと続くものだと思っていた。生まれた時から戦時中。父も母も、祖父も祖母も、そうだった。誰もがそうだ。誰もが、平和な時代のことなんか

憶えちゃいなかった。五百年の時を生きるというエルフですら、それは変わらない。

誰もが皆、自分たちは争うものだと考えていた。自分たちの子供も、孫も、ずっと戦い続けるものだと考えていた。何がきっかけで起きた戦争で、何をどうすれば終わるのか、知る者はおろか、考える者すらいなかった。

だが、そんな戦争は、ある日、あっけなく終わりを告げた。

戦争の発端は誰も覚えていないが、終わりの発端は誰もが覚えている。

デーモン王ゲディグズだ。

彼が現れたことで、戦況は変わった。

このデーモン王ゲディグズというのは傑物であった。

歴代のデーモン王の中でも特にカリスマ性が高く、王として在位した百年でデーモン族を旗頭としたオーガ、フェアリー、ハーピー、サキュバス、リザードマン、オークの七種族連合を一致団結させ、種族共を組み合わせるという編成を考え出し、今までにない新しい戦闘教義を生み出したことで、ヒューマン率いる四種族同盟を圧倒し、その支配領域を大きく広げたのだ。

四種族同盟にとって悪夢のような出来事だった。

それまでの七種族連合は、共闘こそすれ、連携して攻めてきたことはなかった。

巨体で移動速度の遅いオーガをハーピーが空輸したり、サキュバスの桃色濃霧チャームミストが蔓延する湿地帯を、チャームの効かないリザードマンが突破し強襲してきたり……それまで偶発的にしか起こり得なかった連携に、元々連携を磨いてようやく互角だった四種族同盟は抗することができなかったのだ。

だが同時に、チャンスでもあった。

デーモン王ゲディグズによってまとまった軍隊は、今までの七種族連合ではありえないほどに、一枚岩だった。

強いがゆえ、カリスマがあるがゆえ、彼自身が弱点となったのだ。

無論、それを四種族同盟が知っていたわけではない。

ただ、ひとまずゲディグズを倒さなければ、自分たちに待っているのは敗北だけだと容易に予想できたのだ。

かくして、ゲディグズは討たれた。

レミアム高地の決戦で、ヒューマンの王子ナザール、エルフの大魔導サンダーソニア、ドワーフの戦鬼ドラドラドバンガ、ビーストの勇者レトの四人が率いる決死隊がデーモン軍の奥深くへと侵入し、デーモン王ゲディグズを討ったのだ。

多くの犠牲者が出た。ドワーフの戦鬼ドラドラドバンガとビーストの勇者レトはゲディ

グズとの決戦で命を落とし、決死隊の半数以上が死んだ。

ゲディグズを討った後の撤退戦で、ヒューマンの王子ナザールもまた重傷を負った。

ゲディグズ亡き後の変化は劇的だった。

王を失った七種族連合は、またたく間に統率を失った。それはもう、驚くほどにバラバラになった。

ゲディグズの代わりとなる者など、誰も用意されていなかった。

大まかな指示すら発する者がいなくなり、七種族連合の指揮系統は壊滅的な打撃を受けた。

七種族連合は、いつまで経っても下りてこない命令を待ち、戦場を右往左往するしかなく……四種族同盟軍に掃討された。

各種族の王が自分で指揮を取らなければ、そのまま幾つかの種族は滅んでいただろう。

デーモン族を旗頭としていた七種族連合は散り散りとなり、ゲディグズが王として君臨する以前と同様、各種族でそれぞれ戦い始めた。

オーガはハービーと、サキュバスはリザードマンと、オークはフェアリーと、それぞれ組んでいたため、互いに連携を取り合っていたが、あくまで戦術レベルのことでしかなく、各地で敗北を重ねた。

ゲディグズ王が死んで五年。たった五年で、七種族連合は全ての領土を奪われた。

百年の間に手に入れた領土を、全てだ。

七種族連合からしてみれば、そのまま攻め滅ぼされてもおかしくない状況であった。

それだけ四種族同盟には勢いがあった。

だが、和睦という案が出た。他でもない、ヒューマンの王子ナザールが、四種族会議の場でその案を出した。彼らに最後のチャンスを与えよう。彼らに和睦を申し入れよう、と。

それは、長い長い戦争の中でも、特に激戦が繰り返された百年間で疲弊きつた民の声そのものだった。

実際のところ、四種族同盟も限界だったのだ。

ゲディグズが君臨した百年間で、ヒューマンもエルフもドワーフもビーストも数を減らしていた。

平均寿命は大きく減少し、子供をしっかりと育てるだけの土台すら消え失せようとしていた。

誰もが休みたがっていた。もう勘弁してくれよと思っていた。

もし万が一、窮鼠となった七種族連合がまた一致団結して決戦となれば、どうなるか。勝てるだろう。

だが、その後はどうなるのか。あるいは、そのまま共倒れになってしまっているのではないか。選拔権があるうちに、平和への舵を取ろう。

ナザールはそう主張したのだ。

四種族同盟のお偉方は「彼らは絶対に和睦になど応じない」との考えを固持していたが、実際に和睦を申し入れてみると、不思議なことに応じない種族はいなかった。

言葉が通じるかすら不安とされていたオーガや、戦いとレイブこそが至上と言わんばかりのオークまでも、不利な条件を呑んで、あっさりと和睦に応じた。

かくして戦争は終わった。

長い長い戦争は、ようやく終わりを告げたのだ。



それから三年。

平和な時代にちなんで『平和暦』と名付けられた暦の三年目。

人々は長い戦争が終わったことで、何やら狐につままれたような時を過ごしていたが、戦争によって破壊された町が復興し、商人たちによる他種族との交易が軌道に乗り始め、子供が生まれ、人口増加の気配が出始めると、誰もが次第に平和を自覚し始め、新しいこ

とを始めるようになっていった。

学問、芸術、商売、娯楽……それまで軽視されていたものが重要視されるようになり、各種族の常識も変化し始めていた。

新たな時代は幕開けを終え、次なる一幕へと進もうとしていた。

この物語はそんな時代の、ある種族の国から始まる。

オークの国である。

ORC HERO

第一章

ヒューマンの国

Human country

要塞都市クラッセル編

Episode Clasel

STORY

1. 英雄の出発

オーク。

緑色の肌と長い牙、毒や病の効かぬ強靱な肉体を持った、好戦的な種族。

特筆すべきは、強い性欲を持っているということだろう。

彼らにとって繁殖とは、生物的に必要な行為であると同時に、日常的に行われる娯楽でもある。

戦い、食い、犯す。

オークにとって、戦いで手にした首の数と、女に産ませた子供の数は同等の価値を持つ。多くの子供を残し、戦いの中で死ぬ。それこそが、オークが求める最高の生き様である。丈夫な身体に強い繁殖力。

生物としてこれ以上ない条件を備えた彼らだが、実は一つ欠点も抱えている。

それは『基本的に雄しか生まれず、他種族の胎を借りなければ繁殖できない』というものの。

戦争中は敵国の女兵士を捕虜にしては、使い物にならなくなるまで子供を産ませていた

という事実があり、一部の種族からは蛇蝎のように嫌われている。

「おい、あそこにいるの……『ヒーロー』じゃねえか？」

バツシユ。

そう名付けられた男は、オークという集団の中において拔き出た力を持つ、優秀な戦士であった。

彼は戦場に誰よりも早く駆けつけ、誰よりも長く前線に残り、誰よりも多くの敵を倒した。

数多のオークが彼に救われ、数多の戦場が彼の手によって勝利へと導かれた。

どんな強大な敵であろうと真正面から立ち向かい、そして打ち倒す姿は、まさにオークの理想を体現した姿であると言えた。

その功績を讃えられ彼には『ヒーロー』の称号が与えられた。

ヒーロー。すなわち、英雄。

その称号は、オーク最強を示すものであり、最高の名譽であった。

当然、全オークの憧れの対象でもある。

「くう……『ヒーロー』、やつぱかつけえよな！」

「俺、前から『黒頭』を倒した時の話とか聞いてみてえと思つてたんだよなあ……」

英雄の称号を得たバッシユは、あらゆるものを手に入れた。大きな家。立派な武具。食いきれぬほどの食料。使いきれぬほどの特権。そして、全オークからの尊敬と信頼。

オークの若者が欲しいと思うものの、ほぼ全てだ。

「……お、俺、ちよつと行つてくる」

「馬鹿野郎！ お静かにお酒をお飲みになられてんのがわかんねえのかよ！」

「わ、わりい……そうだよな。俺らが気安く話しかけていい相手じゃねえよな」

そんなバッシユには、悩みがあった。

彼は周囲からあらゆるものを手に入れたと思われているが、実はまだ手に入っていないものがあつたのだ。

いや、手に入れないという言い方はおかしい、あえて言うなら、持つていてはいけないものをまだ捨てられずにいた、とでも言うべきか。

さながら、不滅の火にくべられた古の指輪のように……。

「確かに、俺だつて『ヒーロー』の話は聞きてえよ？ それこそ、女の好みとかもさ！」

「ヒーローの女の好みかあ……やつぱヒューマンかな？」

「ばつつか！ あの『ヒーロー』だぞ？ ヒューマンやエルフなんて雑多な女、戦中に抱きすぎて飽き飽きしてんだろ。最近は繁殖場の方にも姿を見せてねえらしいな」

「ヒューマンやエルフに飽きてる……じゃあ、まさかドラゴニユートとか？ あの伝説の種族を!？」

「ありうるぜ！ 『ヒーロー』ならな！」

バッシユは酒場で一人、カウンターに腰掛けて火酒を飲みつつ、今日も悩んでいた。

一体どうすればそれを捨てられるのか……。

いや、捨てるだけならすぐにでもできる。しかし、このオークの国において、バッシユは非常に注目されている。捨てれば、必ず見られてしまう。そして知られてしまう、今まで持つていたという事実を。

オークの英雄として……いや、一人のオークとして、それを知られるわけにはいかなかった。

知られれば、その瞬間、バッシユの誇りと矜持は脆く崩れ去ってしまうだろう。

全てのオークから寄せられていた尊敬は、一瞬にして嘲笑へと変わるだろう。

バッシユのなけなしの自尊心はスタボロに傷つき、翌日から頭陀袋でもかぶつて生きて

いかなければならなくなる……もはや生きてすらいけない。

「お、俺、やつぱ、聞いてみる！」

「やめとけて、不敬すぎんだろ」

「いやー！ 今まで抱いた中で一番いい女は誰だったか聞くぐらいなら、そんな失礼じゃないはずだ。ヒューマンの女騎士^{きし}か、エルフの女將軍^{しやうぐん}か、ピーストの姫君^{ひめぎみ}かはわからねえけどな！」

バッシユは立ち上がった。

身長は二メートル強。オークの中では小柄^{こがら}ながらも、その体中についた傷は歴戦を物語り、引き締^しまった筋肉はこの場にいる誰より密度が高かった。

そして言わずもがな、物腰には隙^{すき}が無く、全身からは近寄りがたいオーラ^{おふ}が溢^{あふ}れていた。彼はギロリと、自分に向かってこようとする男の方を睨^{にら}んだ。

「……」

一睨^{ひとみ}みで、オークの男は止まった。

「す、すみません！ こいつ、ちよつとミーハーで、よく言つて聞かせときますんで……」
とつさにもう一人が頭を下げた。

オークが睨^{にら}まれた程度で頭を下げるなど、恥^は以外の何ものでもない。

が、相手が『ヒーロー』とあれば話は別だ。むしろ頭を下げない方が恥である。

「フン」

バッシユは鼻息を一つ。酒場の出口へと歩いていった。

「ほわあ……かつけえ……」

その一連の流れに、周囲のオークたちは感嘆^{かんたん}の声を漏^もらした。

圧倒^{あつぷ}的^{てき}だった。まさに強者^{あつちやう}だった。

普通のオークなら、あんな風に若者に憧^{あこが}れの眼差^{まなざ}しで近づいてこれたら、すぐに相好^{そうこう}を崩^ふし、自慢話^{じまんわ}を始めてしまうところだ。

『なんだあ若造、俺様の話を聞きてえのか？ ガハハ、いいぜ教えてやるよ。あれはアルカンシエル平原での戦いの時だ。俺様は敵の大群に向かって勇猛果敢^{ゆうもうちやうかん}に云々カンヌン、すると敵の某^{なにか}が云々カンヌン……』

無論、それもいい。

オーケ的価値観で言う、自慢話もまたオークの戦士らしい振る舞いである。戦場での自分の功績を自慢して、何が悪い。当然の権利である。

あるいは虫の居所が悪いと、若者をぶん殴^{なぐ}っただろう。

『目障^{めざわり}りだコラ！ 静かに酒飲んでのがわかんねえのか！』

それもいい。若造に、獐^{どう}猛^{もう}な戦士がいかなるものかを実地で教えてくれるのもまた、オークだ。

この若者として、バツシユに殴られるのなら本望^{ほんもう}だろう。一生の思い出として、宝箱にでもしまっておくかもしれない。

しかしバツシユが見せたのは、それらよりも上だ。

彼が見せたのは、まさに『お前のような木っ端^{こぼ}のオークなど相手にしない』という意味表示だ。

そうとも。オークの強者はこうでなければいけない。

これこそが猛^も者の風格だ。英雄は、そこらの雑魚^{ざぎょ}なんか相手にしちゃいけないのだ。

自分たちは、そんなバツシユと同じ空間で酒を飲んでいた。

若者たちにとっては、それだけで十分だった。それほど、バツシユの振る舞いは格好良かった。

胸がいつぱいになるほどに。

「くう……俺もあの人みてえになりてえぜ」

「バーカ、一生無理に決まってるだろ！」

「わかってんよ！ でも聞いてみたかったな、今まで抱いてきた女の話……」

酒場の中から聞こえてくるそんな声を聞きながら、バツシユは小さくため息をついた。

あるいは、見る者が見れば、帰路に就くその分厚い背中^はは心なしか小さく見えるのがわかっただろう。歩幅^{はは}も若干狭^{せま}く、どこか怯^{おび}えているようにさえ見えただろう。

そう、まさに今の若者は、バツシユの悩みを直撃^{ちよくき}していた。

今まで抱いてきた女？

今まで抱いた中で一番いい女？

そんなものを聞かれても、困ってしまう。

なぜなら彼の悩み。全てを手に入れた彼が、未だに捨てられていないもの。

それは……。

「はあ、憧れるよな。一体今まで、何人の女を犯^はして孕^{はら}ませてきたんだろうな……」

(……ゼロだよ)

童貞^{どうてい}だった。



バツシユは長い戦争の中で生まれた。

戦争中、捕虜^{おが}となり犯^{おが}され尽くしたヒューマンの雌^{メス}の胎^{はら}から這^はい出てきたグリーンオー

ク。

それが彼だ。

彼は生まれて五年目に剣を持たされ、十年目に戦場に出て、敵を倒した。

いかに戦好きのオークといえども、十歳での初陣は早い。

十歳など、さすがに戦士として数えるのもおこがましいほどの年齢だ。

実際、十歳そこそこで初陣を飾るオークのほとんどは、木っ端の如く若い命を散らせるが、当時はデーモン王ゲイグズの考えた戦闘教義があったお陰で、十歳の若いオークでも、それなりの生還率を誇るようになっていた。

あくまで、それなりであるが……。

幸いにして、バッシュは死ななかった。

最初の一年目こそ何度も死にかけたが、二年目には一人前の戦士になり、三年目には一流の戦士になり、四年目には屈指の戦士となり、五年目にはオークの国において並ぶ者のない最強の戦士となった。

最強の戦士。

そう、彼は戦いの申し子だったのだ。

戦場は常に劣勢だったが、バッシュのいるところだけは違った。

彼のいる戦場では、ヒューマンやエルフ、ドワーフの血の雨が降り、臓物が撒き散らされた。

そこにどんな相手がいても、バッシュは戦い、勝った。

猛者と呼ばれる者、剣豪と呼ばれる者、修羅と呼ばれる者、あらゆる者を打ち倒し、戦場に勝利をもたらした。

その上、バッシュは休まなかった。

バッシュは一つの勝利をもぎ取ると、すぐに次の戦場へと向かった。

戦いに次ぐ戦い。

疲れ知らずの最強の戦士は、昼夜を問わず戦い抜いた。

休息を取るのとは三日に一度、万能薬たるフェアリーの鱗粉をその身に振りかけ、ほんの僅かな時間、眠るだけだ。

バッシュはそれに何の疑問も抱かなかった。自分はオークの戦士として、当然の行動をしていると思っていた。

バッシュの戦闘力は圧倒的だった。

各国から「異常なオークがいる」と恐れられた。

実際に戦い、生き延びた者は「あれは、戦いの神グーダゴザの化身だ」と怯えた。

戦後、ヒューマンの大將軍に「あのオークが戦場に出てくるのがあと五年早ければ、負けていたのは我らだったかもしれない」とまで言わしめた。

しかし、そんなバッシュも所詮は個人。

腕っぶしが強いだけの一兵卒でしかない。

局所では勝利できても、大局を変えるほどの力はなかった。

バッシュが戦いを始めて十年目にデーモン王ゲディグズが討たれ、十五年目に戦争は終結した。

戦争には負けたが、バッシュは英雄の称号を得て、多くのものを手に入れた。

大きな家と、食いきれないほどの食料と、立派な武器を手にいれ、国に存在するありとあらゆるオークからの羨望の眼差し。

しかし、気付いた。

いや、知ってしまったと言うべきか。

普通、オークというものは、戦いばかりをするものではないのだ、ということに。

普通、戦いが終わったら、女は持ち帰り、犯すものだった、ということに。

戦争が終わった時、肩を並べて戦った戦士たちの中に、童貞なんて一人もいないのだということ。

今更言い出せなかった。

自分に経験がない、などとは。自分が童貞である、などとは。

知ったのが、あまりに遅かった。もし戦争中であつたなら、話は違つただろう。

いつものように敵部隊を壊滅させ、残った女兵士を木陰にでも連れ込み、華麗に脱童貞すればよかった。そして何度か練習を重ね、これは！と思つた女を連れ帰り、子供の一人や二人でも産ませておけばよかったのだ。

だが、今はできない。

オークの所属する七種族連合は敗北した。

オークもまた和陸に応じた。

無条件降伏ともいえる条約を結んだ。

そして、その条約の中には「他種族との合意なき性行為を禁じる」というものがあつた。つまりレイプ禁止である。

当然とも言える条約であるが、オークにとって信じられないものであつた。

それを禁止されたら、繁殖ができない。滅ぶしかないじゃないか。

が、呑むしかなかった。

今すぐ滅ぶよりはマシだった。

滅んだ方がマシだ。最後の一人になるまで戦おう……という意見も上がったが、オークキングがねじ伏せた。

幸いにして、他種族から死刑囚や重犯罪者などの『奉仕役』が送られてくることになり、繁殖できずに全滅するという懸念は無くなった。『奉仕役』とは、繁殖場に繋がれ、オークの相手をする事となった者たちだ。少なくとも子供が産める間は、オークの子供を産み続けることになる。

なのでぶっちゃけた話、バッシュは童貞を捨てることはいつでもできた。

繁殖場に行き、『奉仕役』を使えばいいのだ。簡単だ。

『奉仕役』の使用は、戦争中の功績に応じた優先順位が定められているが、バッシュなら待ち時間はゼロだ。すぐに童貞を捨てられるだろう。

だが、バッシュが繁殖場に行けば、他の者たちがワラワラと寄ってくるだろう。

今日は、『英雄』の雄々しく堂々とした交尾が見れるぞ、と。

……言うまでもないことだが、童貞にそんな猛々しい交尾ができるはずもない。

彼にできるのは、初々しく、たどたどしく、無様で滑稽な、オークにとつて童貞にしか許されないレベルの、恥すべき交尾だけだ。

そう、このオークの国で童貞を捨てるということは、童貞であつたということがバレる

ということなのだ。

バッシュとしては、それは避けなければならなかった。

そんな恥を晒すわけにはいかなかった。

一人の男として恥ずかしいということもあるが、バッシュはオークの英雄だ。

英雄は常になつた一人。誉れ高き、誇り高き存在だ。オークの英雄が童貞だなどと知れ渡れば、オークという種族全体の誇りが傷つく。バッシュが童貞であることは、一生隠し通さなければならぬ事実なのだ。

かといって、一生童貞でいるつもりもなかった。

バッシュとて若いオークだ。

女を押し倒し、その胎内に己の獣欲を解き放ち、子を孕ませたいという欲求は、強く持つていた。

それだけではない。

強い戦士には、子供を残す義務もある。

オークキングからも、早く繁殖場の雌を孕ませて子供を作って欲しいと、強く願われていた。

ああ、でも童貞ってバレるのは恥ずかしい。

オークにとつて童貞というのは、非常に恥すべきことなのだ。バッシューは童貞であるが、それでも、オークの英雄としての矜持きんぎを持っていた。酒場で自分を羨望の目で見てる若いオークたちを失望させたくなかった。そんな感情の板挟みいたさきになったバッシューは、悩みに悩んだ。戦争が終わって三年間、悩み続けた。

しかし、二十八。

バッシューは今年で二十八歳になった。

あと二年、童貞で居続ければ、魔法が使えるようになってしまいう年齢である。

オークは特殊な訓練を積まなくとも、三十歳を迎えて童貞であれば、魔法が使えるようになってしまふ。

オークメイジは貴重な戦力である。

大半が戦士であるオークにとつて、魔法を使えるというだけで貴重だ。

彼らは女と切り離された特殊な環境で隔離されて育てられ、魔法が使えるようになると、額に紋章が浮かび上がる。

その紋章を持った者は基本的に敬われる。

三十年間我慢し、国に貢献した証だからだ。

が、それはあくまでオークメイジの話だ。オークウォリアー、つまり戦士にこの紋章が付くのは、これ以上ないほどの恥だと言われていた。

『魔法戦士はオークの恥部』とは、古くから伝わる格言である。

オークにとつて、戦場で女兵士を倒すということは、連れ帰ってレイプするということと同義である。つまりオークの魔法戦士とは、『十数年も戦場に出ているのに、一度も勝てないぐらゐ弱く臆病な戦士』を指すのである。

生き恥だ。

そんな恥を晒すぐらいなら、戦場で華々しく散りたい。

ともあれ、そんな年齢まであと二年。

黙っていても、自分が童貞だったということがバレてしまふ。

「よし」

そこで、彼は決意した。



その日、バッシューは目覚めると、己の愛剣を手を取った。

よく整備された剣は、戦場に出て六年目、戦場にてデーモンの部隊を救出した際、お礼

としてデーモンの將軍から贈られた物である。

肉厚で頑丈、錆びず、切れ味も落ちない魔法の剣だ。

その頑丈さのお陰で、バッシュはその後、一度たりとも武器を失わずに戦い続けることができた。

まさに相棒である。

そんな剣を背負い、皮鎧を身に着けた。オークは階級が上がるにつれ、重厚な防具を身に着けることを許される。

英雄たるバッシュは、その最上位である金属製の全身鎧を身に着けることができたが、身に着けたのは自分が慣れ親しんだ軽鎧だ。

鎧など、どうせ一日戦えば壊れてしまうのだから、着けるだけ無駄ぐらいに思っていた。その後、家の中を簡単に掃除した。

掃除が得意なオークは、意外に多い。なぜなら、戦場においては、己の痕跡を消す必要に迫られる時があるからだ。優秀な戦士は、痕跡は愚か、足跡一つ残さない。

バッシュも掃除は得意だ。

とはいえ、バッシュもそこまで徹底して掃除するつもりはなかった。適度に片付けた後、バッシュは家から出た。

「……」

バッシュは家から出て、一度だけ振り返り、見上げた。

バッシュの家は、オークの国において、二番目に大きな家だ。

だが、この家はバッシュが一人で住むには大きすぎた。

本来なら客人が毎日のように押しかけ、連日連夜、酒盛りをしながらバッシュの武勇伝を聞く宴が開かれるところであつただろう。

だが、童貞であることをひた隠しにしたいバッシュは、決してその宴を許さなかった。武勇伝を話すことになれば、女性経験も話さなければならないからだ。

バッシュは踵を返すと、目的地への道を歩き始めた。

「あ、バッシュさんだ……」

バッシュが道を歩くと、オークの戦士たちが頬を赤く染めながら道を譲った。

普段は「道？ 譲ってほしけりや殺してみな。てめえの胴体と首がオサラバする前にな」なんて言うオークの戦士たちが、だ。

「今日も『ヒーロー』はかけえぜ……」

「あの方向、族長のところにいくのかな？ 何の話だろう？」

「まさか、次期族長の話じゃねえか？」

「ええ、バツシユさんが次の族長かよお！ やつべえじゃん。マジヤバじゃん。俺、絶対に一番に忠誠誓うよ」

「バアツカ、お前……俺が一番に決まってるんだろお？」

そんな声を聞きながら、バツシユは一軒の巨大な建造物の前にたどり着いた。

巨大な骨と大木を組み合わせて造られたそれは、オークの里で最も巨大な建造物だ。中に入ると、大きな広間となっていて、いくつもの篝火がたかれている。

最奥では、数人のオークたちが床に座り、共に食事を摂っていた。

「バツシユさん……！」

「親父、バツシユさんつすよ」

「バツシユさん、飯一緒にいいますか？」

地面に座る者たちは、口々にバツシユを歓迎した。

彼らはバツシユと同年代であるが、全員が例外なくバツシユにアコがれていた。

バツシユが戦場で活躍し始めた頃はバツシユを嫌っていた者もいたが、今では誰もがバツシユのようになるうとしていた。

バツシユはオークたちのヒーローなのだ。

「バツシユ、か……」

そんな中、バツシユをにらみつける者がいた。

最奥、ただ一つだけある豪華な椅子に座る、巨大なオークである。

白いヒゲを生やした初老のオークだが、その大きさはバツシユの二倍近くあり、脇には身長ほどもある鉄槌が置かれていた。

彼の名はネメシス。

オークキング・ネメシス。

その性格は剛毅にして蛮勇。終戦間際まで前線で戦い続けたオークの中のオークであり、全てのオークから父と慕われる者でもあり、オークの王である。

バツシユもまた、彼を尊敬し、そして忠誠を誓っていた。

「何の用だ？」

ネメシスの視線は、非常に強かった。

通常のオークであれば、泡を吹いて失神するほどの強さだ。

「……」

だが、バツシユは動じない。ただ瞳に決意の炎をもち、ネメシスを見返すのみだ。その炎にあぶられてか、ネメシスはフツと笑った。

「息子たちよ、少し席を外せ」

そして、周囲で食事を摂っていた息子たちを、別室へと下がらせた。

息子たちは、自分の食料を手につくと、文句も言わずに席を立った。

王と英雄の会話。聞きたくてたまらないが、彼らもまた戦争を戦い抜いたオークの戦士。命令とあらば従うのが戦士の掟だ。

名残惜しそうにしつつも、そのまま家の外へと出ていった。

「……」

二人きりになった後、バッシューはネメシスの正面に座った。

間には残った食べかけの料理が幾つか置かれているが、どちらも手を付けることはない。

「……」

「……」

しばらく、二人は黙って見つめ合っていた。

その沈黙は、大声で喚き散らすように話すのが好きなオークとは思えないほど、長く続いた。

だが、永遠に続くわけではなかった。

篝火がバチリと音を立てると同時に、ネメシスが口を開いた。

「その目、すでに決意は固いようだな」

「はい、俺は……」

「みなまで言うな、わかっておる」

バッシューが決意を口にしようすると、ネメシスが遮った。

「お前が繁殖場にほとんど顔を出しておらぬことぐらい、耳に入っておるから……」

ネメシスは、鋭い視線をバッシューへと送りつつ、言った。

「探しにゆくのだろう、妻を」

「！」

オーク社会は乱交社会である。

一人の女性を多人数でシェアし、多くの子供を産ませるのが常だ。

しかし、一部の優秀な血を残すため、戦争で功績を残した戦士には、妻を娶る権利が与えられている。

妻とはすなわち、自分専用の女である。

自分の身の回りの世話をし、そして自分だけの子供を産む存在。

それを手に入れるのは、まさにオーク人生の最終目標といっても過言ではないだろう。妻というのは、特別な存在だ。

限られたオークにのみ許される、勲章のようなものだ。

ゆえに極上の女が求められる。例えばそれは、国で一番と謳われる美姫であったり、女だてらに騎士団長まで上り詰めた女騎士であったり、千年に一度の天才と呼ばれる女魔術師であったり。

そうした特別な存在を捕まえ、屈服させ、妻とする。妻が特別であればあるほど、旦那となるオークの格も上がる。

バッシュはオーク史に残るほどの英雄だ。

その妻となれば、相当な女であることが求められる。

繁殖場に繋がれている、他国の重犯罪者や奴隷では務まらない。

むしろ、英雄であるバッシュがその程度の相手を抱くのは、オークの誇りに傷を付けることにすらなる。

だからこそ、バッシュは自分で探しに行くと言っているのだ。

オークの誇りに傷を付けぬために。

と、オークキングは、考えていた。いやさ、見抜いていた。まさに慧眼であると、オークの誰もが褒め称えるだろう。

実際は節穴だが。

「お見通し……でしたか……」



バツシユは恥じ入るように顔を伏せた。

その顔は真っ赤だ。まさか、王にバレているとは思わなかったのだ。自分が童貞であることが。

それだけではあるまい。妻という単語まで出てきたのだ。

オークの国を出て、どこか別の場所ですり童貞を捨てようと思っていたこと、できれば最初の相手は処女がいいと思っっていること、その処女を妻にして練習しまくろうと思っっていること……そうしたことを全て見透かされていたのだ。

恥ずかしいわけではない。

オークの英雄ともあろう者が、そんな童貞丸出しの思考で旅に出るなど。

それも、全オークの父とも言える相手に知られてしまうなど。オークの恥晒しと誇られてもおかしうはない。

まあ、実際には何も知られてはいないのだが、バツシユもオーク……ネメシスをまさに慧眼だと褒め称えた者の一人だった。

「キング、止めないでくれ。俺には……」

「止めはせぬ」

バツシユの言い訳じみた言葉を、ネメシスは手を上げて遮った。

そして、自嘲げな笑みを浮かべた後、何かに耐えるように目をつむり、言った。

「行くがよい。皆には黙っておこう」

ネメシスは常々申し訳なく思っていた。

せめて戦争中であれば、あるいはせめて「他種族との合意なき性行為を禁じる」という条約さえなければ、族長として、バツシユに妻を見つける機会を与えてやれたものを、と。

英雄に、その功績にふさわしい暮らしをさせてやれたのに、と。

今は戦争が終わり、条約もある。

そんな状況で、妻にふさわしい極上の女を見つけてくるのは、並大抵のことではない。

オークがレイプ以外で女を娶ったというのは、戦争が始まって五千年……ついぞ前例がない。

まさに試練だ。試練を自らに課そうというのだ。まさに英雄だ。

オークの英雄が、英雄たらんと試練の旅に出る。

国元で悠々自適に暮らせるというのに、旅に出てくれる。

オークは戦争に負けてなお、誇りを失っていないと証明しようとしてくれる。

これを止めて、何が王か。

「……感謝します」

バッシユは静かに頭を下げた。

英雄となり、オーク最強と呼ばれるようになった今でも、王には勝てる気がしなかった。

力は自分の方が上かもしれない。

戦えば、自分が勝利するだろう。

だが、自分の考えや浅ましさを瞬時に見抜き、しかし決して嘲笑することなく、名誉を回復する機会と時間を与えてくれる。これほどの思慮深さを持ち、配下思いで優しいオークは、他にはいない。

（彼こそまさにオークキング。王の名を冠するにふさわしい男だ。この御方が死ぬまで、自分はこの御方に忠誠を誓おう）

バッシユは改めて、そう思うのだった。



こうして、バッシユは旅に出た。

童貞を捨てるための、長い長い旅に……。

2. フェアリー

バッシユは森の中を歩いていた。

堅く尖った樹木の立ち並ぶ鬱蒼とした森、道はなく、時折獣道が横切る程度。

人が通れば傷だらけになるような藪は、しかし、オークの硬い皮膚はものともせず、長年の戦争において培われた勘は方向感覚を狂わせることもなかった。

向かう先は東。

オークの国の隣に位置するヒューマンの国である。

戦争に勝利した四国のうち、特に戦功があったということで、現在は最も大きな領土を持つている。オークの国の領土のほとんどを取得したのもヒューマンである。

無論、オークはそのことに怨みなど持っていない。勝者が全てを手に入れるのは、戦いの常識だからだ。

なぜヒューマンの国に向かっているのか。

それには、単純明快な理由があった。

『繁殖するならまずヒューマン』。

オークの格言の一つである。

ヒューマンは繁殖力が強く、非常に孕みやすく、個体差はあるが体も丈夫で、見た目も悪くない。

オークにとって繁殖に非常に適した種族であった。

バッシュはその格言に迷うことなく従ったのだ。

(懐かしいな……)

藪をかき分けて進みながら、バッシュは昔のことを思い出していた。

ほんの三年前、この森は激戦区だった。

今はないが、この森の奥地にはオーク族の最後の砦が存在しており、ヒューマンの主力がその砦を陥落させようと、猛攻撃を仕掛けてきたのだ。

バッシュは当時、その砦を守るべく、この森を走り回り、人間の部隊を叩いて回っていた。

その奮闘の甲斐あって、ヒューマンに砦を落とされることなく、終戦を迎えるに至った。だが、その砦も結局、戦争終結と同時に取り壊された。

あの戦いでバッシュは、三ヶ塔に及ぼうかというヒューマンの部隊を撃破した。

その中には、女兵士も大勢いた。

あの内の何人かを持ち帰ってれば、バッシュはすでに童貞ではなかったはずだ。

その場合、砦は陥落しただろうが、どうせ取り壊されるのであれば一緒であろう。

しかし皮肉なものだ。

もしそうなっていれば、バッシュが英雄の称号を得ることもなかっただろうから……。

「ん？」

バッシュが昔の己の行動の是非を問うていると、遠くの方から、かすかに血の臭いが漂ってきた。

どこかに怪我をした動物がいるのか。

あるいは、狼共が縄張り争いでもしているのか……。

「行ってみるか」

バッシュは何の躊躇もなくそうつぶやき、駆け出した。

単なる好奇心ではない。食料を確保するつもりだった。

動物を捕まえるのは容易ではないが、手負いなら体力の低下も早いし、血を流しているなら臭いでの追跡も簡単だ。手負いの獣は抵抗が激しい時もあるが、バッシュにとってそんな抵抗など、あってないようなものだ。

戦争中も、何度か争って傷ついた動物を捕まえたものである。

「……」

バッシュは疾風のように森を駆けた。

オークは鈍重であると言われているが、彼にそれは当てはまらない。

バッシュは、あらゆるオークの中で最も速いと言われる俊足を持っていた。

そして強靱な皮膚は、生い茂る藪や、突き出た枝葉では傷一つかず、鋼鉄のような肉体は障害物の多い森でも減速することはない。

バッシュはとんでもない速度で、現場へと急行した。



バッシュがたどり着いた時、戦いは佳境を迎えていた。

轍があるだけの狭い道の外れで、車軸の折れた馬車が横転している。地面には食料品や調度品が散らばり、馬の死体が転がっていた。

立っているのは二人のヒューマン。二人は剣を持ち、敵と対峙していた。

ヒューマンを囲んでいるのは、バグベアと呼ばれる二足歩行の熊のような魔獣であった。バグベアの数は六匹。

(バグベアの群れが行商人を襲撃した、ということか)

その様子を見て、バッシュはそう結論付けた。

珍しくもない。戦争が終わって数年、世界は平和になったが、人を襲う獣が消滅したわけではない。町の一步外に出れば、弱肉強食の世界が待っているのだ。

「……!!」

「グルルル!」

バッシュがガサガサと音を立てて茂みから出ていくと、バグベアたちが気付いた。

三匹はヒューマンを睨んだまま、残り三匹がバッシュの方を向くと、全身の毛を逆立てて唸り声を上げてきた。

バッシュは立ち止まることなく、バグベアたちを睨みつけた。

そして間髪を容れず、叫び声を上げた。

「グラーアアアオオオオオ!」

ウオークライ。

それはオークが戦いを始める際に放つ、雄叫びである。

それは、物理的な振動を伴って森中に響き渡った。木々からは一斉に鳥が飛び立ち、バ

グベアたちの皮膚がジリジリと震えた。

「グウ……」

それだけで、彼らは理解した。

眼の前のこのオークには、絶対に勝てない、と。

戦意を喪失した彼らは尻尾を丸め、一瞬で森の中へと逃げ込んでいった。魔獣はいつだって、自分より強い者の気配に敏感なのだ。

「さて……」

バッシューはバグベアの気配が遠ざかっているのを確認してから、残った二人のヒューマンに目を向けた。

（ほう……これは……）

顔面蒼白で、剣を手にガクガクと足を震わせている二人は、女だった。

双方、歳は三十を少し超えたあたり、といったところだろうか。

顔色は悪いが、体つきは健康的で悪くない。ヒューマンを嫁にするなら、十代後半か二十代がいいと言われている。それ以下だとまだ子供を産めないし、それ以上だと子供を産める回数が減るからだ。とはいえ、三十代がダメというわけではない。要は子供が産めればいいのだから。

（中々の美人だな！）

ぶっちゃけ、オークの一般的な価値観に照らし合わせてみても、彼女らはさほど美人というわけではなかった。

とはいえ、バッシューはほとんど女を見たことがない。

いや、いくらでも見たことはあるのだが、これだけ近距離で、品定めをするように見たことはなかった。

初めてまじまじと見るヒューマンの雌は、よだれが出そうなほど色っぽく見えた。

最初の嫁候補である。

バッシューはしばらく二人を見ていたが、意を決して話しかけることにした。

「ゴホン。お前たち……俺の子供を産まないか？」

オーク的には普通のプロポーズである。

「ギヤアアアアア！」

「犯されるう！」

一瞬であった。

今まで震えていたのは何だったのかと思うほど、素早かった。

二人の女は、剣を持ったまま、他のものをほっぽりだし、脱兎のごとく逃げ出してしま

った。

バッシュは追いかけることもできず、手を伸ばした姿勢のまま固まってしまった。

「……なぜだ」

断られるならまだしも、逃げられる理由がさっぱりわからなかった。

助けてあげたというのに……。

「わけがわからん……」

とはいえ、一筋縄ではいかないことは理解していたつもりだ。

最初から妻が見つかるわけもない。そう思い直し、バッシュは踵を返した。

当初の予定通り、ヒューマンの町に向かうのだ。

「む？」

と、そこでバッシュの鋭敏な耳が、ある音をキャッチした。

コンコンという、なにかを叩く小さな音だ。

バッシュは耳に手をやると、音の元を探り始めた。

こうした小さな音を聞き逃さないことは、戦争では重要だった。

新月の夜、足音を殺して近寄ってくるビーストの奇襲部隊に気付くには、耳と鼻に頼るしかない。

「こつちか」

その音は、馬車の中からしていた。

車輪が砕け、横転している馬車。バッシュは音を追って、馬車の中をあざり始めた。

「……」

馬車の中に、大したものではなかった。

恐らくあの二人が普段から食べていたであろう乾物などの食料品と、わけのわからない

調度品ばかりだ。

武具の類もない。

せめて女奴隷でも積んでいてくれれば……と思わざるを得ない。

「ん？」

と、バッシュの鋭敏な耳が、またコンコンという小さな音をキャッチした。

どうやら、見落としがあったらしい。バッシュは瓦礫のように積み重なった調度品を、

一つずつどかしていった。

いくつか大きな調度品をどかしたところで、隙間から淡い光が漏れ出した。

バッシュは、見慣れたその光に、小さくため息をついて、調度品の隙間に手をつ突っ込んだ。

出てきたのは、一抱えほどのビンだった。しつかりとした鉄の蓋の上に、魔法陣の描かれた札が一枚、ベタリと貼られていた。そんなビンの中には、小さな人間が入っていた。大きさは三十センチ程度、全身がほのかに発光し、背中には二対の小さな羽が生えている。

フェアリー族だ。

「お前は……」

フェアリーは、バッシュの顔を見て驚いた顔で、バクバクと口を動かしていた。どうやら、札のせいで出られないどころか、声も出せないらしい。

バッシュは蓋に貼られた札を指でカリカリと剥がすと、鉄の蓋を力任せにバカリと開いた。

その瞬間、フェアリーは凄まじい速度でビンの外へと飛び出し、バッシュの周囲を高速でグルグルと回り、最後にはバッシュの顔にベタリと張り付いてきた。

「旦那あゝ!! お久しぶりですー!」

バッシュは、自分の顔に張り付いて、スリスリと頬ずりをしてくるフェアリーを指先でつまむと、自分の顔から引き剥がした。

フェアリーは指先でつままれながらも、歓迎するかのよう両手を広げ、バッシュに抱きつこうとしている。

「やあー旦那、助かりましたよお! このまま一生ビンに閉じ込められたままかと思いましたが、それどころか、旦那が助けてくれなかったら、荷物の下敷きになって一生を終えるところでしたね! なんか、旦那はいつでもオレっちを助けてくれるんだからなあ! あれ? 旦那? どしたんすか、そんな顔して、もしかして、オレっちのこと、忘れちゃいました?」

「忘れるわけがない」
知り合いであった。

このフェアリーの名はゼル。本名は長ったらしく憶えていないが、ゼルと呼んでいたのは憶えている。

戦争中、フェアリー族とオーク族は連携していた。

フェアリーは飛行速度が非常に速く、体から落ちる粉は傷を癒やす力があるが、体も小さく、攻撃手段は魔法のみで脆弱。あまり兵士として活躍できる種族ではなかった。

そこで、フェアリーは伝令や諜報員、治療係として、オークの国と連携することとなった。

ゼルは、オークの国に派遣された伝令兼諜報フェアリーの一人で、バッシュによく命令や戦況を伝えるにやってくれた存在だ。

ちなみに、フェアリーがデーモン率いる七種族連合に加盟したのは、ヒューマンに虐げられていたからである。

フェアリーという存在は、観賞用かつ治療薬として、ヒューマンの国では高値で売買されるのだ。

戦争終結後、フェアリーはヒューマンと不可侵条約を結んだ。

だが、今もこうして捕まっては、死ぬまで飼いか殺されている者がいる。

戦争後、一番虐げられているのは、フェアリーかもしれない。

「ていうか、旦那、どうやってオレっちが捕まったことを知ったんです？」

「知らん。偶然だ」

「偶然……？」

バッシュが指を離すと、ゼルは高速で馬車の外に出て、周囲を見回ってきた。

聞くより見る。偵察兵の性だろう。

そして、馬が死体になっているのを確認すると、超高速で戻ってきて、バッシュの耳を引っ張った。

「ちよちよちよ！ 旦那！ まずいですよ！ ヒューマンの馬車を襲うなんて！ 条約違反ですよ！ 条約違反！」

「俺が襲ったわけじゃない。バグベアに襲われていたのだ」

「それ言って信じてもらえないじゃないですか！ 馬車壊れて、オークが近くにいるとなれば、単純思考のヒューマンなんて一瞬で『オークが馬車を壊した！』って決めつけますよ！ ほら、早く離れるっすよ！ こんなところを他の人に見られたら、あつという間に討伐隊を組まれて、包囲殲滅作戦っす！」

戦いなら望むところだ。

と言いたいところではあったが、これからヒューマンの国で嫁探しをしようというのに、それではまずい。

「あ、ほら！」

と、その時彼らの耳が捉えたのは、金属の鎧がこすれるガチャガチャという音だ。

戦争中に幾度となく聞いた、ヒューマンの兵士が複数名で作戦行動をしている時の音……。

バッシュは咄嗟に茂みへと身を隠した。

バッシュほどの戦士であれば、敵軍が少数である場合、正面から堂々と立ち向かっても

打ち破ることができる。

だが、状況がわからぬ状態で戦闘を行うことが、必ずしも勝利に繋がっているわけではない。

バッシユの目的はヒューマンの妻を手に入れること。

それも処女の娘で童貞を喪失し、幾度とない訓練を経て圧倒的なテクニクを手に入れ、オークの国へと戻る。それが勝利というものだ。

ヒューマンの兵と戦い、採めるのは勝利に繋がらない。子供でもわかることだ。

ゆえにバッシユは離れた場所に隠れ、様子を見ることにした。

行かず、引かず、丁度いい位置で戦況を見守ることも、時には必要なのだ。

考えなしに突撃するだけがオークではなく、バッシユは『オーク英雄』だ。見極めるのである男であった。

「……ない！……オーク……だ！」

「……………見つけ出せ！ 抵抗するなら……殺せ！」

会話は断片的であるが、どうにも物騒であった。

この襲撃がオークによるものであると決めつけ、激昂しているように見える。

その上、どうやら指示を出している者はまだ若いようで、声が高い。

バッシユも憶えがあるが、若者の指揮というものは、猪突猛進が過ぎる時も多い。オークが襲撃したと決めつけているところに姿を現せば、即座に戦闘が開始されることが容易に想像できた。

「旦那、どうするっすか？ やるっすか？」

戦いになれば、バッシユは彼らを容易に蹴散らせる。

だが、バッシユはオークの英雄だ。そんなバッシユがヒューマンの兵士を殺せば、問題になり、オークの国まで飛び火するだろう。

恥を偲んで旅に出た身だ。この上、国にまで迷惑をかけるのは避けたかった。

「いや、ここは引こう」

「了解っす」

バッシユの言葉にゼルがうなずき、二人はその場を後にした。



「それで、お前はなんで捕まっていたんだ？」

馬車から十分に距離を取った後、バッシユは改めてゼルに聞いた。

ゼルは戦争終結と同時に、フェアリーの国に戻ったはずだった。

フェアリーはヒューマンに狙われているが、フェアリーの国は断崖絶壁に囲まれている。ヒューマンはそうそう近づけない。

仮に近づく方法があったとしても、ゼルはフェアリーの中でもトップクラスのスピードを誇る。並の人間に捕まえられるものではないはずだった。

「やー、それがっすね。フェアリーの国って、基本的に退屈なんすよ。オレっちって、こう見えて好奇心旺盛な冒険家じゃないっすか。だからまだ見ぬ何かを求めて——」

「もういい、わかった」

「さっすが旦那、一を聞いて十を知るってワケっすね」

おおかた、退屈から国を出て、花畑どこかで遊びほうけているところを発見され、葉か何かを嗅がされたか、スリープの魔法をくらって捕まえられた……というところだろう。フェアリーという利那的な生物が鈍臭いヒューマンに捕まる経緯など、どれも似たり寄ったりだ。

「いやー、でもこんなところで旦那と再会できるなんてなあ、オレっちは幸せ者だなあ」
 バッシユの周囲をびゅんびゅんと飛び回りながら、ゼルはそんなことを言い出した。
 フェアリーは陽気な種族で、イタズラが大好きだ。感情が昂ぶれば昂ぶるほど、無駄に動き回ること知られている。

「というか、旦那こそ、なんでこんなところにいるんです？　旦那はオークの国で英雄の称号を得たって聞きましたよ？　あ、英雄の称号、おめでとうっす！　で、オークで英雄って言ったら、族長の次に偉いわけじゃないっすか。もう、全オークの尊敬を一身に集めて、何不自由なくバラ色の生活を送っているものと思ってたんすけど」

「……」

「もしかしして、誰かに嫉妬されて、陥れられちゃったっすか？　族長殺しの罪を着せられて、里から夜逃げするしかなかった……悲劇！　復讐なら手伝うっすよ！　オレっちの陰湿な刃が敵の喉を搔つ切るっす！」

「オークは嫉妬などしない。族長も健在だ」

英雄と呼ばれる存在に対し、嫉妬するオークは皆無だ。

英雄と呼ばれる存在は、それだけの偉業を達成した者である。

尊敬すれども嫉妬などするわけがない。まあ、もちろん、そういった特例を除けば、オークも嫉妬ぐらいはするが。

「じゃあ、なんでっすか？」

バッシユは口をつぐんだ。

童貞を捨てるための旅、などとは口が裂けても言えない。いくら相手が戦友といっても、

言えることと言えないことがある。

「や、まあ言いたくなければいいんすよ？　でも、オレっちは戦争中もさつきも、旦那には助けられてばかりつすからね。覚えてるつすか？　最初に会った時のこと。オレっちはヒューマンの兵に捕まってて、『粉を出すのに手足はいらねえな』とか言われて絶体絶命、そこに旦那が颯爽と現れて、『地獄に行くのに手足はいらん』って言って、ヒューマンの手足を全部ちぎってやったんすよ！　いやあ、あれは爽快だったなあ……マジベタボレだったつす！　あの日から一生旦那に付いていくって決めたつす！　とにかくそういうことだから、できれば力になりたいんすよ。雑な旦那にわかるかなあ、このフェアリーの繊細で健気な気持ち」

ババツと、目の前で健気なポーズをするゼルを適当に手で払いつつ、バツシユは考えた。考えてみれば、バツシユはオーク以外の種族についての知識に乏しい。

知っていることといえば、どの種族が繁殖に向いていて、どの種族が向いていないかわからいだ。

対するゼルは、伝令かつ諜報員だったこともあり、様々な種族の生活習慣に詳しい。情報収集も得意だ。今後の活動をする上で、彼が力になることは、間違いない。

「……妻を探している」

「妻……つすか」

ゼルは飛び回るのをやめ、ピタリと止まった。

そのまま、考えるようにマジマジとバツシユの顔を見る。

バツシユは童貞であることがバレそうに思い、目をそらした。

ゼルはしばらく止まっていたが、やがてポンと手をうった。

「オークにとって妻とは特別な存在つすからね！　旦那ほどの英雄にもなれば、妻を持つてもおかしくない。でも今のオークの国の情勢では、旦那が満足いくような妻を見つけることはまず不可能。だから旦那は自分で嫁探しの旅に出た……ってことつすね！」

「まあ……そんなところだ」

ゼルの見立てはオークキングとほぼ同じものである。

バツシユという人物を知っていると、大体そういう発想になるのだ。

まさに『慧眼のゼル』と呼ばれるだけであつた。もちろん自称であるが。

「そつかあ……旦那が嫁かあ……オレっちがフェアリーじゃなければ立候補するところなんすけどねえ」

フェアリーは非常に体が小さい。

当然ながら、他種族との繁殖も不可能だ。そもそも、雄雌の区別すらあつたりなかった

りする適当な種族である。そのお陰でオークと共同戦線を張れたという背景もあるが……とにかく、妻としては不適合であった。

「ようし！」

ゼルはしばし思案げな顔をしていたが、やがてドンと胸を叩いた。

「わかりました！　そういうことならオレたちにお任せくださいっす！　今の時分、オークの妻になろうって女は少ないかもしれないっすけど……なあに、旦那なら、妻の十人や二十人、あつという間に見つかるっすよ！　なんせオレたちがなりたいたいぐらいつすからね！」

バッシュも、戦時中のゼルの有能さについてはよく知っていた。

彼が危険を顧みず敵陣に侵入し、貴重な情報を持って帰ってきたことは何度もあった。

彼の情報収集能力は、フェアリーの中においてもトップクラスだ。もつとも、相当な回数、敵にとつ捕まり、殺されそうになったこともよく知っていたのだが……。

今はすでに戦争中ではない。妻を探すだけなら、危険も殆どない。

頼りにしても問題ないだろう。

「お前がそこまで言うなら、任せよう」

「任せました！　というわけで、さっそく町に行くっすよ！　こんな森には美女も美少

女もいませんっすから！　レッツゴーゴー！」

かくしてバッシュは、戦友であるゼルと再会した。

オークとフェアリー。

二人は一路、ヒューマンの国を目指すのであった。

3. 要塞都市クラッセル

要塞都市クラッセル。

そこは、何百年もの間、オークとの戦争の前線にあり続けた町だった。建物のほとんどは石で造られ、各地からは鍛冶の煙が上っている。

戦時中ほどではないが、商人や町人よりも、いかつい顔をした兵士が目立つ。町は小高い丘の上にあり、二重の城壁に囲まれていた。

城壁の内側には大砲や投石機が設置されており、町の各所に置かれた物見櫓からは、かつてオークの土地だった森が一望できる。

まさに要塞である。

オークとヒューマンの戦争は、この要塞都市を何度も奪い合う戦いだったとも言える。数千年の間、オークはこの要塞を幾度となく奪い、そして奪い返された。

ヒューマンも必死だった。この要塞を奪われれば、国土はオークに蹂躪される。男は殺され、女は持ち帰って繁殖用の奴隷とされる。ヒューマンは、そのことをよく理解していた。だからこそ、戦争が終わった今でも、オークに対する警戒を忘れていない。

もつとも、戦争は多くのことを教えてくれた。

オークが性欲だけで動く怪物ではないということ、繁殖に他種族が必要だから他種族を襲うこと。

独自のルールを持ち、独自の誇りを重んじること。

そして、それらを理解した上で話せば、交渉が可能だということだ。

その学びのお陰で、ヒューマンはオークとの和睦を成功させることができた。

オークを誇り高き戦士であると認めた上で、ヒューマンの中でも特にオークに認めてもらえるほどの力を持った女騎士に交渉させることで、オークに「他種族の女にも戦士がいて、誇りがある」と知らしめ、『他種族との合意無き父尾を禁止する』という条約を締結。しかし、それだけではオークはただ滅びの一途を辿ってしまうため、国中から重犯罪者の女性をかき集め、オークの国で『奉仕活動』をさせることで、オークから徹底抗戦する理由を奪ったのだ。

お陰で、今は比較的安定しており、細々とだが貿易も始まっている。

もつとも、ヒューマンの中には、オークが理性のない怪物だと思っている者も多い。無知な者は、種族に関係なく一定数存在している。

さらに言えば、戦争が終わったのはほんの数年前だ。オークに対し、私的な怨みを持つ

ている者も少なくはない。実際、オークにも国から追放され、ヒューマンの国に流れて人を襲うような輩もいる。

だから、警戒するのは間違っていない。

「でもまさか、町に入るまであんな時間が掛かるとは思わなかったすね」

「そうなのか？ ヒューマンの町はどれもあんなものではないのか？」

バッシュがクラッセルに到着して、約三時間が経過していた。

そのうち、一時間は入り口で門番と揉めたことによるものだ。

オークというだけで、怯えられ、槍の穂先を向けられた。

ゼルが間に入り、バッシュが旅人であることや、危険なはぐれオークでないことを事細かに説明してくれなければ、町に入れなかっただろう。

門番は最後までオークを町に入れることに抵抗があるようだったが、最後にはバッシュを通してくれた。ヒューマンの国には、旅人を快く迎え入れろという法はあっても、オークを町に入れてはいけないという法はないのだ。

「女が多いな」

「ヒューマンの町っすからね」

バッシュは宿の窓から通りを行き交う人々を見つ、その女の数に驚いていた。

戦争中でも、これほど大量の女を見たのは、サキュバスの軍と連携を取った時ぐらいだ。まあもともと、サキュバスを女というのは、少し語弊があるが……。

ちなみに通りを歩く女の方というと、宿から覗くバッシュを見た途端ギョツとし、せかせかと足早に去っていく。

「これだけ女がいれば、選び放題だな」

「あ、ダメっすよ！ ほら、あのヒューマンの左手の薬指を見て欲しいっす」

言われ、バッシュは女の左手に注目する。

そこにはキラリと光るなにかがついていた。

「うん？ 指輪を着けているな」

「あれはすでに結婚しているって証なんすよ。ヒューマンは基本的に一人の男と一人の女でツガイになるっすから、ああいうのを狙ってもダメっす」

「ほとんどの女が着けているぞ」

「ヒューマンは、結婚しないと一人前と認めてもらえないみたいっすからね。男も女も。ある程度の年齢になったら、だいたい皆結婚するみたいっすよ」

オークと違い、誰もが妻を娶って結婚する。

そんな常識に、オークであるバッシュは少々違和感を覚えた。

だが、ヒューマンは男女の比率が同じぐらいだから、そうしたこともありうるのだろうと、すぐに納得した。

むしろ、女の方が妻となるのに忌避感を持っていないのなら、好都合である。

「だから、とりあえず指輪を着けてない女を探す必要があるっすね」

「ここに来る途中で声を掛けた女は指輪を着けていなかったはずだが？」

「あー……」

そう、バッシュは宿に到着するまでに一度、女性を見かけて声をかけようとし、悲鳴を上げて逃げられていた。

声をかける、という段階ですらなかった。

バッシュが近づいていただけで、女は悲鳴を上げたのだ。

「やっぱ、オークに対する偏見が強く残ってるみたいっすね」

「そうなのか……？」

「オークは男と見れば見境なく襲いかかって殺し、女と見れば見境なく襲いかかって犯し孕ませる奴ばかりだって」

「間違っではない。戦争中は皆そうだった」

もつとも、現在はオークキングの定めた法で禁じられている。

はぐれオーク以外に、見境なく誰かに襲いかかるオークはいないだろう。普通のオークは、誰もがオークキングに忠誠を誓う、誇り高き戦士なのだから。

もつとも、誰もがオークに対して偏見を持っているわけではないのもわかっている。

女の悲鳴を聞いて駆けつけた衛兵。

彼らの中にはあまり偏見を持たない者もあり、事情を説明すると、親身になって「旅人なら、とりあえず宿を取った方が良い」と、オススめの宿を教えてくれた。

現在、宿で寛いでいられるのも、彼のお陰と言えよう。

「ヒューマンは皆、戦争中のオークが記憶に新しいんすよ。あと数年はオークっただけで警戒されるっすね。いきなり逃げられるとは思わなかったっすけど」

「警戒されているのか……確かに、お前に会う前にも、女に声を掛けても逃げられた」

「へえ、ちなみになんて声を掛けたんすか？」

「俺の子供を産まないか？」と

そう言うのと、ゼルは「あちゃー」と言いながら額に手を当てた。

「それじゃダメっすよ」

「ダメなのか？」

「いいっすか、ヒューマンにとって出産っつのは、宗教的な意味合いもある大事な儀式な

んすよ」

「なんと」

儀式と聞いて、バツシユはオークに伝わる戦神への祈りの儀式を思い出した。年に一度しか行われない儀式だが、翌年の戦いの吉凶を決める、大事な儀式だ。

オークの中に、その儀式を軽んじる者はいなかった。

「それに結婚にしたって出産にしたって、基本的には惚れた相手としかしないものなんす。初対面のよく知らない相手の子供なんて、産むわけないんすよ」

「そ、そうだったのか……」

カルチャーショックであった。

大半のヒューマンの雌がオークと交尾するのを嫌がるのも道理である。敵だったから嫌がっていたわけではなかったのだ。オークはヒューマンの身体だけでなく、宗教もまた踏みにじっていたのだから。

「だから、ヒューマンを妻に娶りたかったら、まずは相手を惚れさせないといけないんすよ！」

偏見である。

ヒューマンの全てが恋愛結婚しているわけではない。しかしゼルの知識では、そういう

ことになっていた。

「むう……しかし、ヒューマンを惚れさせる方法など知らんぞ」

オークに恋愛という概念はない。

女は一方的に犯し、屈服させるものだ。それを禁じられ、惚れさせろと言われても、バツシユはどうしていいかわからない。

「そこはオレっちに任せて欲しいっす！ オレっち、こう見えてヒューマンには詳しいっすからね！」

ゼルは胸をドンと叩いてそう宣言した。

伝令と諜報に特化していたフェアリーは、確かに各種族について詳しい。ヒューマンに限らず、エルフにもビーストにも詳しい。

とはいえ、それはあくまで、戦術や習性、冀の種類や足跡、夜目の有無といった、戦闘に関するものである。恋愛に関する情報は、道端に落ちていた雑誌や酒場の噂話からの聞きかじりであった。

「頼もしいな。旅を始めてすぐにお前と出会えたのはまさに僥倖だ。それで、具体的にどうすればいい」

「そっすねえ」

ゼルは得意げに笑いつつ、テーブルの上にトンと乗った。
指を一本立てると、早速レクチャーを開始する。

「まず、ヒューマンの女は綺麗好きっす！ 汚れてたり、臭かったりするのとは絶対にダメっすね！」

レクチャー１・身綺麗であれ。

「ならば、女を探しにいく前に水浴びをするか」

「水浴びの後、ビーストとの戦前のアレもつけるといいっすよ」

「あれか……あれは逆に臭いのではないか？」

「何言ってるんすか！ めっちゃいい匂いじゃないっすか！」

バッシユは己の体を見下ろして、そう言った。

戦争中、オークはあらゆる種族と戦った。ビースト族もその一つで、特に鼻が利く種族だ。

オークの強い体臭はあつという間に感知され、奇襲や待ち伏せを受ける事態が頻発した。そこで、ビーストとの戦の直前に水浴びをして臭気を消し、香水をつけるという対策が講じられた。

草や花の匂いに紛れ、ビーストの鼻を惑わせるのだ。

ちなみに香水はフェアリー産で、現在はヒューマンやエルフにも輸出されている。

「ほら、オレっちのを貸してあげるっすから！」

「うむ」

レクチャー２・いい匂いをさせろ。

香水のあまつたるい匂いは、一般的なオークには不人気である。ゆえに、ビーストとの戦で香水をつけることを嫌がる者もいた。もつともそういう者は、例外なく死んだが。

バッシユはというと、違う。

彼はビースト族との戦いを生き抜いた戦士だ。

闇夜の中から襲い来るビースト族の恐ろしさは、身にしてみてわかっている。

夜も満足に眠れないほどだった。それが、香水をつけるだけで、安心して眠ることができさる。

少なくとも、この香水の匂いを発しているうちは、ビースト族の威力偵察隊に奇襲を受けることはないのだから。

「じゃ、さっそく水浴びっすね！ 背中を流すのは任せてほしいっす！」

ゼルは空中でクルンと動くと、入り口の扉にシュバツと飛んでいき、ドンドンと叩いた。
「店主さん！ 店主さん！ 旦那が水浴びをするっすから！ 桶と水を所望するっす！」

ゼルがそう呼びかけると、ややあつて扉が少し開き、店主が恐る恐るといった感じで顔をのぞかせた。

「オークが水浴びなんてするのか……?」

「なんすか! オークが水浴びしちゃ悪いんすか!? あんたらヒューマンはいつもオークのことを臭くて汚え種族だって思つてるみたいすけどね、ちゃんとしたオークなら、ヒューマンの町にくれば、ヒューマンの鼻の氣遣いぐらいできるんすよ!」

「わかった、わかった。そうキンキン怒鳴るな。用意しよう。銅貨一枚だ」

「了解つす」

店主は意外そうな顔をするも、銅貨一枚を手にとると、すぐに水を用意しにいつてくれた。

「さて、水が来るまで、まだまだレクチャーするつすよ!」

「頼む」

それから、バッシュは水浴びをしつつ、フェアリー直伝の「ヒューマンにモテる法則」を学習していった。



「とりあえず、これだけ守っていれば、ほぼ確実に一人ぐらい落とせるつすね」

「身ぎれいにし、匂いを抑え、堂々とし、話を……」

水浴びが終わった後、バッシュは指を折りながら、ゼルから聞いた法則を反芻していた。彼は真面目なのだ。援軍の要請をされたら、三日三晩寝ていなくても駆けつけてしまうほどに。

だからいい加減なフェアリーの言うことも、疑うことなく素直に聞くのである。

「……」

唐突に、バッシュの動きが止まった。

バッシュの鋭敏な耳が、唐突に騒音を捉えたからだ。バッシュは耳をすませ、その音が自分たちの部屋を包囲していくのを確認し……。

「やれやれ、どうやらアンコールが必要なようつすね。いいつすか、ヒューマンの女つてのううあ!?!」

ゼルはバッシュがいきなり背中の大剣を抜き放ったのを見て、度肝を抜かれた。

「な、な、なんすか!? 敵襲つすか!?!」

ゼルは慌てつつも、腰から爪楊枝のような杖を引き抜いた。

そこで、ゼルも気付いた。

周囲からガシャガシャと、金属のぶつかり合う音が聞こえていることに。完全に包囲されている。ここまで包囲されて、なぜ気付かなかったのか。

「音無しの魔法か」

バッシュはヒューマンが奇襲でよくつかう魔法を思い出し、警戒を強めた。

音無しの魔法は、文字通り音を消す魔法だ。ただし、ある一定の範囲にしか効果を及ぼさない。要するに、近づきすぎると相手に音が聞こえてしまう。全身鎧を身に着けたヒューマンの軍勢がよく使う魔法の一つだ。音が聞こえたということは、近づきすぎたか、あるいは包囲が完成したと見て、接近してきたか……。

統率が取れているところを見ると、後者だろう。

「人数と気配から察するに、馬車の近くにいた一団か」

「つけられてたんすかね？」

「その気配はなかったが、相手はヒューマンだ。こういうこともあるう」

ビーストやエルフならまだしも、ヒューマンの、それも全身鎧を身に着けた一団の尾行に気付けないほど、バッシュは毫碌していない。

ヒューマンはわずかな情報から相手の位置を特定する技術に長けている。恐らく、バッシュが気付かぬような、僅かな痕跡を追跡されたのだろう。

「旦那、どうします？ 皆殺しにするんなら、窓側の方からやって、入り口に回って扉側の奴を迎撃つのがよさげっすし、突破するんなら警戒の薄い扉側っすね、歩き方からして、こっちから攻めてくるとは思ってない感じっす。ま、この数ならどう動いても余裕だとは思うっすけど」

ゼルが落ち着いた様子でそう言った。

若くふわふわとした見た目だが、このフェアリーもまた歴戦の兵であった。

瞬時に敵の布陣を見抜き、攻めやすそうな方を教えてくれるのはお手物である。

バッシュとゼルは組んで長い。戦時中は、この程度の包囲など、幾度となく破ってきた。バッシュを殺したければ、この百倍は必要だろう。

余裕の相手だ。

だが、バッシュは首を振った。

「いや、戦うわけにはいかん。会話で解決しよう」

そう言って、大剣から手を離れた。

なぜ包囲されているのかわからないが、バッシュは何もやましいことはしていないのだ。

「いやあ……難癖つけられて町から追い出されるだけだと思っすけど……」

「だとしてもだ。どのみち、ここまで追われたということは、あの場にいたことはすでに

バレているだろう。逃げたところで何も変わらん」
などと話していると、扉が音を立てて蹴破られた。

「動くな！ そのオーク！」

飛び込んだのは三人。

簡易的な鎧を身に着けた二人の兵士と、トサカの付いた兜を被った騎士だ。

バッシュは長年の戦いの経験から、このトサカが騎士の証であると知っていた。

さらに言えば、ヒューマンの騎士は、オークの戦士長に相当するということも知っている。

つまり、この騎士がこの集団のリーダーだ。

「すでに止まっている！ 何の用だヒューマン！」

「ふん！」

騎士は数歩歩くと、兜を脱ぎ去った。

下から現れたのは、輝くような金髪をポニーテールにまとめた、美少女だった。

（声が高いと思ったが、女だったのか……いや、それにしても……）

彼女の顔を見た瞬間、バッシュの中で何かが弾けていた。

キュッとイチジクを口いっぱい頬張った時のような甘酸っぱい感覚がバッシュの全身

を支配していく。

（可憐だ……）

凜とした眉、意志の強そうな口元、少しだけ性格の悪そうな吊り目、透き通るような白い肌……。

鎧を身に着けているから体つきはわからないが、物腰からしつかりと筋肉がついた丈夫な体であることはわかる。

森で見かけた女たちや、道端で話しかけようとした女よりも数段……いや数十段は上の女だ。

こんな美しい女性と、互いに裸になって交尾をする可能性があると考えたと、バッシュの脳髓を電流が走り抜けてしまう。

股間に直撃つてやつだ。

もつとも、頑丈な革の下穿きのお陰で、見咎められることはなかった。

そんなバッシュの変化を知ってか知らずか、彼女はバッシュをにらみつけ、叫んだ。
「街道にて、オークに馬車が襲われたとの通報があった。貴様の仕業だな！」

続きは、7月17日発売のファンタジア文庫で！